

進路選択に影響を及ぼす諸要因の検討

松 本 卓 三

岡山理科大学教養部

(1993年9月30日 受理)

問 題

進路指導は、学校教育のなかで、重要な機能の一つであることは論を待たない。広井・中西(1978)は、最近の進路指導は、かつての指導と比較すれば非常に普及したが、その説く理念と現実とのギャップは甚だしく、進路指導の根底となるべき、自己理解とか人生観の育成、また将来の人生設計等について、学校での指導がほとんどなされていない、と述べている。小竹・山口・吉田(1988)は、次のようなことを述べている。今日、進路指導は「生き方の指導」であり、「人生設計の指導」であるといわれており、この進路指導をもっと計画的、組織的、体系的に実施していくのが学校進路指導である。この学校進路指導を中核に据えて、産業・職業の世界での進路指導・職業指導を継続的、組織的、発展的に展開していくことが求められている。また、佃(1988)は、文部省(1977)の進路指導についての定義「進路指導は、生徒一人一人が、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広めかつ深め、やがて自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教師の組織的・継続的な指導・援助の過程である」を引用して、生徒が適切な進路の選択をするための指導・援助にとどまらず、卒業後も進路の問題や転機に直面したときに、それを自分で解決したり、適切な転機に対する判断が出来るよう、自己指導能力や行動様式・態度の育成をめざした指導がなされなければならない、と言っている。そして、また、彼は、次のようなことも言っている。生き方や職業は、学業成績のみによって決まるものではない。学業成績を唯一の拠り所として、自分の進路を考えてきた生徒の場合、職業選択の時を迎えて初めて、自分がこれまでに歩んできた進路の方向が間違っていたことに気付かされる。生徒に対する一面的評価やその考え方に基づく指導は、生徒の全人的発達を妨げることになる。人は、本来、いろいろな職業につく可能性を持っているのである。学業成績以外の要因(例えば、興味、性格、価値観、家庭の事情、あるいは親の希望など)を考慮に加えながら多面的・多角的に進路の方向を見つめていくことが望まれるのである。これら彼の述べていることの中では、生徒という表現がなされてはいるが、大学生にも十分当てはまることではないかと思うのである。

以上述べてきたことから、進路選択に影響を及ぼす要因については、おそらく、高等学校時代までの進路指導の影響が強く残っており、大学生の段階においてすら、「自分の生き方」や「人生設計」、「自己の確立」、「人生観・職業観の確立」等が十分になされていないように思えてならない。そこで、進路選択に影響を及ぼす要因について、大学生の段階でどのような捉え方がなされているのかということをも明らかにしていきたいと考えたのである。

そこで、本研究に関係する今までの主な研究について概観することにする。

先ず、進路選択に影響する要因についての研究に関して述べる。Super (1957 日本職業指導学会誌, 1960) は、就職に関する因子として、知能、教育程度、課外活動、労働の経験 (パートタイム・アルバイト)、パーソナリティ、縁故、運、職業指導、家族、興味、産業構造、経済的動向、を挙げている。増田 (1969) は職業選択行動の規定因として、自我的要因 (性能、興味、価値観)、現実的要因 (社会・経済、職業、家庭)、対人的要因 (家族、教師、その他の人)、偶然的要因 (求人状況、知人の紹介、職業情報との接触) の大きな4つの要因を挙げている。植村 (1977) は個人の心理的要因 (興味、知能、特殊能力、パーソナリティ、自己概念、親の職業の認知、職業観)、本人をとりまく家族関係的要因 (職業に対する親の期待や態度、家庭の職業との関連における本人のきょうだい構成の中での位置、家庭の社会的地位)、マクロな社会・経済的背景要因 (経済的変動要因——不景気になると公務員志願者が増加、国の政策や産業発展の要因による職業人口構成の移動) の大きな3つの要因を挙げている。森下 (1983) は、内的要因として性格特性、適性能力、活動分野への関心、価値観を、外的要因として親の職業、母親の就労状況、対人的影響 (父親、母親、友人、その他)、親の養育態度、経済的状況、を挙げて、さらに、出生順位、進路の決定時期を個人的属性として挙げている。甲村 (1989) は、職業選択時に自分で行う個人理解 (自己理解という) のためには、次のような視点が重要であろう、と次のような3つのことを挙げている。まず1つは職業的能力で、それは就職に際して職場でどんな能力が必要とされるかである。次の1つは性格と興味で、それはどの方面の仕事に興味があるかである。今1つは人生目標とか人生観で、それは職業選択時の個性理解としては、大事にしたい側面であるということである。仙崎 (1988) は、職業選択の規定要因として大きく環境的・文化的・社会的要因と、個人的・心理的決定要因との2つの要因を挙げている。雇用職業総合研究所 (1990) は、仕事選択の際に、重視したことがらについての調査を実施している。その調査項目は、能力・性格、興味、仕事の安定性、仕事の将来性、有名企業、収入、休日・休暇、拘束時間、組織にしばられないこと、地元就職、家族の希望、であった。小杉 (1990) は、若年者の職業・進路の選択の決定を左右する要因として、本人の内発的な興味、適性、価値観などとともに、それに関連した外部的要因のさまざまな影響がある、といっている。

次に、進路選択に影響を及ぼすものとしての発達段階の研究について述べる。

Ginzberg et al. (1951) は、職業選択の3つの発達段階について述べ、その発達段階の3番目の段階の現実的な選択の時期は、17歳に始まり、探索、結晶化、特殊化の段階を経て成人初期（22歳ごろから、遅くとも24歳）まで続き、現実との妥協がなされる、と述べている。また彼は、職業決定の要因として、発達の点では、興味、適性、価値観、職業の状況の順に重視される、と言っている。Super (1957 日本職業指導学会, 1960) は、職業生活を5段階に区分している。その2番目の段階として探索段階（15歳～24歳）をあげ、その段階は自己吟味や職業についての探索が、学業や余暇活動を通じて行われ、職業的役割が試みられる、としている。彼は、この時期を、さらに次ぎように3つに区分している。暫定期（15歳～17歳）：欲求、興味、能力、価値、進学や就職の機会のすべてが考慮され、暫定的な選択がなされる時期。移行期（18歳～21歳）：職業に従事するか、または、学校で専門的な勉強を続けながら、自己実現が可能かどうかを考える過程で、現実的要因の考慮が重視されるようになる時期。試行期（22歳～24歳）：適当な仕事が見いだされ、手始めの仕事が生涯の仕事の糸口として試みられる時期。Tiedeman (1962) は、職業的発達における意志決定過程を分化と統合を通しての職業的同一性を形成する過程とみており、次のようなことを言っている。実際の過程を2つに区分し、予期の時期と実現と適応の時期に分け、予期の時期は探索、結晶化、選択及び明細化、また実現と適応の時期は、導入、移行、統合の各段階に分けられる。実際の決定にはこれらの7つの側面が複合し、相互に関連して行われる。

さらに、進路選択に影響を及ぼすものとしての出生順位についての研究について述べる。小川・田中（1979）は、父親の職業が息子の職業選択の及ぼす影響に関する研究で、息子の父親の職業の継承希望には、出生順位（長男、非長男）による相違は全くなかった、と言っている。また、田中・小川（1985）は、職業選択に及ぼす親の職業的影響についての研究で、1人兄弟長男、2人兄弟長男、2人兄弟次男の3者について、親の職業の継承率の比較を行っている。その結果は、出生順位と親の職業の継承性の関連は高くなかった、と言っている。

これらの諸研究を基にして、本研究では、進路選択に影響を及ぼす要因を可能な限り多く挙げて、それらに対する重視する程度を調査して、どのような要因が進路選択に影響を及ぼしているのかを、また、その因子構造はどのような構造になっているのかを、明らかにしていきたい。

そこで、仮説として次のことをあげる。

1. 進路選択に影響を及ぼす要因として重視される要因は、興味、適性、職業の発展性、職業の安定度、労働条件、親の助言、教師の助言、だろう。その要因の人生観、価値観はさほど重視されていないであろう。
2. 進路選択に影響を及ぼす要因の大学学年間の比較では、3年生は就職決定までに若干の時間があるので、希望的な面が強くてそれに関した要因を、4年生は就職を決定

する時期なので、現実的な面に関した要因を重視しているであろう。

3. 進路選択に影響を及ぼす要因の出生順位間の比較では、長男は非長男よりも家族関係要因により影響を受けているであろう。

4. 進路選択に影響を及ぼす要因の因子は、数個程度の因子が抽出されるであろう。

方 法

被 験 者：大学工学部，3，4年生男子，140名。

調査時期：1991年7月。

調査方法：調査1. は「あなたは進路選択を行う場合，次に挙げてあるものをどの程度重視しますか。」という質問をして，5段階尺度で答えさせた。その際に取り上げた進路選択に影響を及ぼす要因は Table I に示した48項目の要因である。この進路選択に影響を及ぼす要因の調査項目については，Ginzberg et al. (1951)，Super (1957 日本進路指導学会誌，1960)，増田 (1969)，植村 (1977)，雇用職業総合研究所 (1988) 等を基にして取り上げた。調査2. は在籍している学年の調査をした。調査3. は出生順位の調査で，①兄弟が1人の場合，②兄弟が2人以上で長子の場合，③兄弟が2人以上で長子でない場合，の何れに該当するかを答えさせた。

結果と考察

1. 進路選択に影響を及ぼす各要因に対する重視度

進路選択に影響を及ぼす各要因に対する重視度をみるために，その各要因の平均値（以下， M ）及び標準偏差（以下， SD ）を算出した（Table I）。その M が4.00以上であった要因は，「1. 興味」，「41. 職業の発展性」，「40. 職業の安定度」，「2. 適性」，「43. 労働条件(2)労働時間」，「42. 労働条件(1)給料」，「44. 労働条件(3)福利厚生」の要因であった。逆にその M が2.00未満であった要因は，「26. 家代々の職業」，「25. 母親の職業」，「27. 親類の人の職業」であった。

以上のことから，進路選択により影響を及ぼす要因は，職業の将来性，労働条件，興味，適性などであり，それらは進路選択に直接かつ強く影響している要因とみてよいものであろう。しかし，そうした要因の基になるとも言える価値観・人生観とか自分の能力・性格，社会・経済の動向，家族などの助言，教師の助言，公的資格，親の職業などのような要因については，上述した重視する要因と重視しない要因との中間的な捉え方がなされている要因である。このことは，進路選択において，かなり近視眼的であるということが言えるのではなからうか。また，希望している職業への就職を実現するための基礎としての自分の将来の人生設計を如何にして行くのか，など自己の確立に関係することがらへの追求をして行こうという意識が，かなり弱いように思われてならないのである。この結果は，ほぼ仮説1のとおりと言えるが，親の助言や教師の助言等については予想外にその重視度が

Table I 進路選択に影響を及ぼす要因の平均値と標準偏差
($N = 140$)

順位	No.	要 因	M	SD
1	1	興味	4.29	.71
2	41	職業の発展性	4.24	.80
3	40	職業の安定度	4.14	.86
4	2	適性	4.11	.70
4	43	労働条件(2)労働時間	4.11	.83
6	42	労働条件(1)給料	4.06	.81
7	44	労働条件(3)福利厚生	4.02	.82
8	3	能力	3.86	.88
9	47	就職後の人間的成長	3.83	.99
10	48	職業に対する知識	3.81	.76
11	28	自己理解	3.74	.78
11	45	将来(就職後)の昇進	3.74	.95
13	4	性格	3.68	.88
14	9	気力	3.64	.88
15	7	人生観	3.63	.94
16	33	国内社会・経済の動向	3.61	.92
17	10	健康状態	3.57	.91
18	34	国際社会・経済の動向	3.54	.93
19	35	産業構造の状況	3.50	.91
19	6	価値観	3.50	.95
21	22	教師の助言	3.35	.93
22	38	職業の社会的評価	3.31	.88
23	23	就職指導課の助言	3.24	.90
24	46	就職の難易度	3.21	.93
25	15	父親の助言	3.20	1.02
26	30	両親の扶養	3.17	.96
27	21	先輩の助言	3.16	.88
28	5	学業成績	3.08	.87
29	11	特技	3.07	.91
29	29	家の経済状態	3.07	1.03
31	8	体力	3.04	.88
32	16	母親の助言	3.02	.95
33	39	職業の人気度	2.95	.90
34	20	友人の助言	2.94	.87
35	12	公的資格	2.86	.97
35	37	生まれ育った地域環境	2.86	1.04
37	32	運	2.78	1.17
38	36	職業の就業者の割合	2.74	.92
39	31	就職の際の縁故	2.56	1.06
40	13	アルバイト経験	2.46	1.07
41	19	親類の人の助言	2.45	.97
42	14	クラブ活動	2.39	1.07
43	17	祖父の助言	2.29	.99
44	18	祖母の助言	2.26	.96
45	24	父親の職業	2.20	.99
46	27	親類の人の職業	1.74	.87
47	25	母親の職業	1.69	.76
48	26	家代々の職業	1.62	.79

進路選択に影響を及ぼす要因に対する重視度は5段階評定で行った。

高くなく、進路選択に際しては、親や教師の意見をあまり聴かず自分で選択をしていこうとする意識が強いようである。

Ginzberg et al. (1951) は、進路選択においては最初は興味が優先し、ついで能力が考慮され、その後、価値観の選択が進路選択を支配する、と述べている。このことからすると、本研究の結果は、大学生の後半の段階になっても、まだ、進路選択の最初の段階にあるように思える。また、増田 (1969) は、中学生男子の職業選択行動の規定因で、教師の影響力はごく限られたものであって、このことが家庭環境の影響を増大させる、と述べている。しかし、本研究では、同様な結果が出ていない。それは、発達段階による差ではないかと思う。また、世の中の豊かさにも影響を受けているのではないかと思う。

2. 進路選択に影響を及ぼす要因の大学学年間の比較

進路選択に影響を及ぼす各要因の M と SD とを学年ごとに算出し、さらに、その各要因の M について学年間の比較をするために t 検定を行った (Table II)。4 年生が 3 年生よりも M が有意に高い要因は「4. 性格」で、3 年生が 4 年生よりも M が有意に高い要因は「23. 就職指導課の助言」, 「42. 労働条件(1)給料」, 「43. 労働条件(2)労働時間」であった。また 4 年生が 3 年生よりも傾向として M が高い要因は「7. 人生観」, 「8. 体力」, 「10. 健康状態」, 「32. 運」で、3 年生が 4 年生よりも傾向として M が高い要因は「1. 興味」, 「48. 職業に対する知識」であった。

これらの結果から、4 年生は 3 年生と比べて、進路選択に関して、人生観といった基本的なことや自分自身のことに強く関心が向いているものと考えられる。一方、3 年生は 4 年生と比べ進路選択に関して、あまり基本的なことではなく、自分の興味や労働条件といった表面的なことに関心が向いているように考えられる。従って、進路選択において、3 年生は、この学年になっても、自分の希望という面を強く考え、現実的な面はあまり深く考えていないように思われてならない。4 年生は就職決定をする時期なので当然のこととはいえ、自分の希望と現状とをうまく適合させるために、現実と自分自身により目を向けているように思われる。この結果は、ほぼ仮説 2 のとおりであった。

大学 3, 4 年生の時期は、ちょうど、Super (1957 日本職業指導学会誌, 1960) のいう職業発達段階の探索段階に当たり、3 年生はその発達段階の暫定期か移行期に、4 年生はその発達段階の移行期か試行期に、それぞれ当たるのではないかと思う。また、Ginzberg et al. (1951) のいう現実的な時期が、この 3, 4 年生の時期に当たり、3 年生はその段階の探索、結晶化の時期に、4 年生はその段階の結晶化、特殊化の時期に、それぞれ当たるのではなかろうかと思う。4 年生は、就職がほぼ明確になる時期であり、3 年生はまだ就職が決まるのに若干の時間があるということで、これら両者の間に進路選択行動の上で差がでてきたのだと思う。

3. 進路選択に影響を及ぼす要因の出生順位間の比較

出生順位別に M と SD を算出した (Table III)。そして、各要因について、出生順位

Table II 進路選択に影響を及ぼす要因の学年ごとの平均値と標準偏差及び t 検定

No.	要 因	3 年生 ($N=82$)		4 年生 ($N=58$)		t 検定
		M	SD	M	SD	t 値 ($df=138$)
1	興味	4.38	.66	4.16	.76	1.82 [†]
2	適性	4.15	.74	4.07	.64	
3	能力	3.90	.79	3.79	.76	
4	性格	3.55	.91	3.86	.80	2.07*
5	学業成績	3.17	.85	2.95	.88	
6	価値観	3.45	.95	3.57	.93	
7	人生観	3.51	1.02	3.79	.80	1.74 [†]
8	体力	2.93	.85	3.19	.90	1.73 [†]
9	気力	3.60	.84	3.71	.93	
10	健康状態	3.46	.86	3.72	.96	1.67 [†]
11	特技	3.11	.92	3.02	.88	
12	公的資格	2.98	.99	2.71	.91	
13	アルバイト経験	2.44	1.00	2.48	1.16	
14	クラブ活動	2.30	1.02	2.50	1.13	
15	父親の助言	3.13	.97	3.29	1.07	
16	母親の助言	3.01	.96	3.03	.93	
17	祖父の助言	2.24	.93	2.34	1.06	
18	祖母の助言	2.24	.92	2.29	1.02	
19	親類の人の助言	2.45	.91	2.45	1.05	
20	友人の助言	3.00	.88	2.86	.84	
21	先輩の助言	3.10	.97	3.26	.71	
22	教師の助言	3.27	.91	3.47	.93	
23	就職指導課の助言	3.39	.87	3.03	.91	2.36*
24	父親の職業	2.12	.93	2.31	1.07	
25	母親の職業	1.66	.72	1.74	.82	
26	家代々の職業	1.54	.67	1.74	.92	
27	親類の人の職業	1.78	.88	1.69	.86	
28	自己理解	3.70	.84	3.81	.68	
29	家の経済状態	3.18	1.03	2.91	1.01	
30	両親の扶養	3.18	.93	3.16	1.00	
31	就職の際の縁故	2.59	.99	2.53	1.15	
32	運	2.63	1.16	2.98	1.15	1.75 [†]
33	国内社会・経済の動向	3.56	.93	3.67	.90	
34	国際社会・経済の動向	3.57	.94	3.48	.91	
35	産業構造の状況	3.49	.90	3.52	.91	
36	職業の就業者の割合	2.79	.89	2.66	.94	
37	生まれ育った地域環境	2.80	.98	2.95	1.11	
38	職業の社会的評価	3.28	.91	3.34	.82	
39	職業の人気度	2.94	.97	2.97	.79	
40	職業の安定度	4.16	.82	4.10	.90	
41	職業の発展性	4.24	.77	4.22	.83	
42	労働条件(1)給料	4.18	.84	3.90	.74	2.02*
43	労働条件(2)労働時間	4.23	.85	3.95	.78	1.98*
44	労働条件(3)福利厚生	4.05	.84	3.98	.78	
45	将来(就職後)の昇進	3.78	.88	3.67	1.02	
46	就職の難易度	3.28	1.00	3.10	.80	
47	就職後の人間的成長	3.74	1.01	3.95	.94	
48	職業に対する知識	3.91	.74	3.67	.77	1.85 [†]

* $p < .05$ † $p < .10$

Table III 進路選択に影響を及ぼす要因の出生順位ごとの平均値と標準偏差

No.	要 因	①兄弟が1人の者 (N=68)		②兄弟が2人以上で長子の者 (N=41)		③兄弟が2人以上で長子でない者(N=31)	
		M	SD	M	SD	M	SD
1	興味	4.37	.71	4.27	.73	4.13	.66
2	適性	4.15	.71	4.12	.67	4.03	.70
3	能力	3.93	.79	3.83	.76	3.74	.76
4	性格	3.65	.89	3.63	.90	3.81	.82
5	学業成績	3.15	.81	3.07	.87	2.94	.98
6	価値観	3.43	.91	3.56	.94	3.58	1.01
7	人生観	3.57	.93	3.73	.96	3.61	.94
8	体力	3.00	.87	3.05	.88	3.10	.89
9	気力	3.75	.86	3.41	.94	3.71	.77
10	健康状態	3.57	.93	3.46	.86	3.71	.92
11	特技	3.15	.86	2.90	.79	3.13	1.04
12	公的資格	2.87	.94	2.73	1.04	3.03	.80
13	アルバイト経験	2.38	.99	2.27	1.17	2.87	1.01
14	クラブ活動	2.37	1.00	2.39	1.10	2.42	1.19
15	父親の助言	3.26	.98	3.10	.96	3.19	1.15
16	母親の助言	3.03	.92	2.95	.83	3.10	1.12
17	祖父の助言	2.21	.92	2.49	1.04	2.19	1.03
18	祖母の助言	2.21	.90	2.39	.96	2.23	1.07
19	親類の人の助言	2.53	.93	2.34	.95	2.42	1.07
20	友人の助言	2.91	.89	2.93	.87	3.03	.82
21	先輩の助言	3.21	.82	3.07	.89	3.19	.93
22	教師の助言	3.34	.85	3.29	1.09	3.45	.84
23	就職指導課の助言	3.18	.86	3.07	.95	3.61	.83
24	父親の職業	2.32	.98	2.15	.95	2.00	1.05
25	母親の職業	1.68	.72	1.71	.80	1.71	.81
26	家代々の職業	1.63	.75	1.61	.82	1.61	.83
27	親類の人の職業	1.72	.82	1.73	.86	1.81	1.00
28	自己理解	3.72	.72	3.76	.88	3.77	.75
29	家の経済状態	3.12	1.02	3.05	.99	3.00	1.08
30	両親の扶養	3.22	.94	3.15	.95	3.10	1.00
31	就職の際の縁故	2.68	1.05	2.44	.96	2.48	1.16
32	運	2.79	1.18	2.90	1.19	2.58	1.10
33	国内社会・経済の動向	3.57	.90	3.73	.96	3.52	.88
34	国際社会・経済の動向	3.47	.90	3.71	.97	3.45	.91
35	産業構造の状況	3.41	.91	3.63	.96	3.52	.80
36	職業の就業者の割合	2.66	.82	2.83	1.06	2.77	.91
37	生まれ育った地域環境	2.99	1.02	2.61	.93	2.94	1.13
38	職業の社会的評価	3.28	.91	3.24	.76	3.45	.95
39	職業の人気度	3.00	.92	2.85	.78	2.97	.97
40	職業の安定度	4.18	.80	4.12	.89	4.06	.91
41	職業の発展性	4.22	.82	4.34	.75	4.13	.79
42	労働条件(1)給料	4.00	.79	4.20	.80	4.03	.86
43	労働条件(2)労働時間	4.16	.85	4.17	.79	3.94	.80
44	労働条件(3)福利厚生	4.01	.81	4.10	.76	3.94	.88
45	将来(就職後)の昇進	3.88	.87	3.73	.96	3.42	1.01
46	就職の難易度	3.16	.90	3.27	.80	3.23	1.13
47	就職後の人間的成長	3.85	.93	4.00	.96	3.55	1.07
48	職業に対する知識	3.76	.67	3.78	.92	3.97	.70

間の M の差を検定するために分散分析を行った。その結果、 M に有意な差がみられた要因は、「14. アルバイト経験 ($F(2,137)=3.18, p<.01$)」と「23. 就職指導課の助言 ($F(2,137)=3.60, p<.05$)」であった。また、 M に傾向として差があったのは「45. 将来(就職後)の昇進 ($F(2,137)=2.56, p<.10$)」であった。これら3つの要因について、Ryan 法による多重比較で M の差を検定した。 M の差に有意な結果がでたのは、「14. アルバイト経験」では、①兄弟が1人の者 < ③兄弟が2人以上で長子でない者 ($t(137)=2.39, p<.05$) と、②兄弟が2人以上で長子の者 < ③兄弟が2人以上で長子でない者 ($t(137)=2.39, p<.05$) とであった。「23. 就職指導課の助言」では、①兄弟が1人の者 < ③兄弟が2人以上で長子でない者 ($t(137)=2.24, p<.05$) と、②兄弟が2人以上で長子の者 < ③兄弟が2人以上で長子でない者 ($t(137)=2.57, p<.05$) とであった。「45. 将来(就職後)の昇進」では、①兄弟が1人の者 > ③兄弟が2人以上で長子でない者 ($t(137)=2.28, p<.05$) であった。この結果は、仮説3とは異なり、出生順位間で、進路選択に影響する要因の家族関係要因に直接的な差が認められない。

こうした結果から考えられることは、①兄弟が1人の者と②兄弟が2人以上で長子の者は、③兄弟が2人以上で長子でない者よりも、親の期待がより強く、一定の進路を歩むように親が働きかけているのではないかと考えられる。また、②兄弟が2人以上で長子の者より、③兄弟が2人以上で長子でない者の方が、自分の生き方や将来についてあまり枠にはめられないで進路選択をする傾向があるようにも考えられる。本研究の進路選択に影響を及ぼす要因についての出生順位間の比較からは、あまり明確なことは言い難いように思われる。小川・田中(1979)、田中・小川(1985)の研究からも、親の職業の継承意識は出生順位による相違は認められない、と言っている。このことから、現代においては、かつての家族制度が崩れ、また核家族化しているので、進路選択には、出生順位はあまり影響しなくなっているとも考えられる。仮説3においては、出生順位によって、親の職業や助言、親の扶養、家の経済状態等の家族に関する要因が進路選択にかなり影響するのではないかということを考えていたが、そのような結果は本研究では全く認められなかった。

4. 進路選択に影響を及ぼす要因の因子分析

進路選択に影響を及ぼす要因について、その構造をみるために因子分析を主因子法で実施した。そして、それで得た12因子解(固有値1.00以上)について Varimax 回転を行った(Table IV)。抽出された因子は12因子であった。次に、それらの命名した因子名を述べる。第1因子は「職業に対する基本的知識(情報)」, 第2因子は「家族の助言と職業」, 第3因子は「心身の健康と活力」, 第4因子は「職業の労働条件」, 第5因子は「就職以前の職業的経験」, 第6因子は「職業適性」, 第7因子は「就職の難易度」, 第8因子は「家庭状況に対する理解」, 第9因子は「生き方」, 第10因子は「先輩・友人の助言」, 第11因子は「就職の際の運と縁故」, 第12因子は「学校の教師等の助言」であった。この因子分析の結果は、

Table IV 進路選択に影響を及ぼす要因の因子分析結果

(N = 140)

No.	要 因	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	F10	F11	F12	h^2
34	国際社会・経済の動向	.86	.05	.02	.13	-.16	.04	-.01	.03	.15	.05	-.05	.02	.82
33	国内社会・経済の動向	.85	.10	-.01	.16	-.03	-.04	.05	.05	.20	.06	-.05	.04	.81
35	産業構造の状況	.76	.03	.04	.13	-.07	.01	.09	.12	-.04	-.10	-.03	.13	.69
36	職業の就業者の割合	.53	-.31	.13	.09	.07	-.04	.46	-.03	.11	-.01	-.09	.04	.66
48	職業に対する知識	.52	-.16	.16	-.01	.01	.32	.09	-.04	.14	.08	.15	.09	.49
41	職業の発展性	.47	-.05	.08	.36	.03	.35	.05	.04	-.01	.02	.01	.26	.56
40	職業の安定性	.43	-.20	.13	.42	.14	.08	.12	.13	.12	.18	.08	.36	.66
37	生まれ育った地域環境	.32	-.25	.14	.05	-.12	.32	-.15	.17	.10	.13	-.10	.29	.47
17	祖父母の助言	-.03	-.85	-.03	.06	-.05	-.07	-.12	.06	-.10	.13	-.06	.07	.79
18	祖母の助言	-.04	-.85	-.03	.03	-.05	.08	-.11	.04	-.11	.12	-.10	.09	.79
19	親類の人の助言	.08	-.71	.00	-.03	-.02	.02	-.06	-.08	.05	.40	-.03	.12	.70
15	父親の助言	.04	-.67	.14	.04	-.05	.04	.10	.06	.40	-.04	.06	.34	.77
16	母親の助言	.00	-.67	.02	-.03	-.08	-.07	.11	.08	.35	.05	-.04	.43	.78
25	母親の職業	.06	-.62	.00	-.22	-.11	.09	.41	.07	.03	.05	-.28	-.10	.72
26	世代々の職業	.04	-.47	-.05	-.11	-.28	.15	.18	.30	.10	.08	-.23	-.19	.57
8	体力	-.01	.02	.82	.07	-.13	.09	.09	.14	.15	-.04	-.13	-.04	.77
9	気力	.14	.04	.79	.00	-.09	.03	-.06	.01	.15	.02	-.10	.08	.68
10	健康状態	.05	-.07	.78	.17	-.10	.10	.08	.13	.03	.01	.11	.08	.70
43	職業の労働条件(2)労働時間	.08	-.01	.05	.87	-.07	.30	.02	-.01	.05	.00	-.09	-.09	.79
44	職業の労働条件(3)福利厚生	.23	-.05	.20	.81	-.09	.07	-.05	-.01	.03	.09	-.09	-.09	.79
42	職業の労働条件(1)給料	.13	.17	-.06	.74	-.04	.08	.23	.22	-.04	.11	-.04	.05	.72
45	将来(就職後)の昇進	.23	.04	.12	.49	-.24	.24	.07	.13	.11	-.03	-.16	.28	.56
12	公的資格	.19	-.11	-.02	.14	-.71	.02	.03	.17	.07	.00	.11	.13	.64
11	特技	-.08	-.05	.16	-.01	-.60	.24	.04	.02	.04	-.02	-.10	-.01	.46
14	クラブ活動	.11	-.29	.18	.09	-.53	-.02	.03	.13	.18	.25	-.34	-.18	.68
13	アルバイト経験	.28	-.08	.27	.15	-.52	.33	.13	-.04	-.18	-.03	-.13	-.02	.60
3	能力	.13	.07	.15	.20	-.38	.32	.25	-.24	.36	-.23	.08	.09	.66
2	適性	-.02	-.01	.17	.25	-.07	.66	-.11	-.11	.07	-.30	.02	.08	.66
1	興味	.21	.15	-.21	.03	-.17	.64	-.07	.12	.01	.04	.08	.02	.57
47	就職後の人間的成長	.34	-.26	.30	.21	-.10	.42	-.19	.07	.18	.14	.05	-.02	.60
5	学業成績	-.04	.18	-.02	.03	-.19	.06	.63	.06	.15	.23	.15	.13	.59
39	職業の人気度	.12	-.04	.10	.23	.08	-.04	.56	.12	.20	.02	-.20	.31	.58
24	父親の職業	.23	-.40	.14	-.05	-.06	.02	.48	.09	.27	.03	-.03	.06	.58
46	就職の難易度	.18	.05	.16	.26	-.12	.16	.43	-.06	.36	.06	.04	.04	.50
30	両親の扶養	.05	-.15	.13	.08	-.03	.05	-.01	.84	.06	.10	.03	.06	.76
29	家の経済状態	-.08	.01	.15	.15	-.24	.02	.21	.70	.06	.11	.20	.12	.72
28	自己理解	.20	-.07	.37	.07	.09	.33	-.10	.42	.09	-.04	-.15	-.11	.53
7	人生観	.19	-.07	.12	.07	-.02	.07	.07	.11	.76	-.08	-.05	-.14	.69
6	価値観	.25	-.03	.17	.07	-.01	.04	-.05	.02	.68	.10	-.04	.03	.58
21	性格	-.12	.05	.21	-.07	.03	.33	.01	.06	.35	.17	-.32	.21	.51
4	先輩の助言	-.02	-.27	.02	.10	-.02	.01	.09	-.04	.02	.81	-.10	.11	.77
20	友人の助言	.02	-.35	-.05	.07	.01	.06	.19	.02	.01	.71	-.01	.22	.73
32	運	-.03	-.03	.06	.29	-.01	.10	-.01	.10	-.04	.13	-.69	.18	.64
27	親類の人の職業	.15	-.43	.09	-.09	-.08	.09	.08	.01	.10	.08	-.63	-.07	.67
31	就職の際の縁故	.27	.16	.02	.14	-.17	-.14	-.01	.05	.19	-.12	-.58	.17	.58
22	教師の助言	.28	-.15	.15	-.01	-.02	.08	.12	.00	.08	.30	-.05	.67	.69
23	就職指導課の助言	.09	-.27	-.10	-.08	-.06	.04	.10	.01	-.06	-.22	-.14	.64	.59
38	職業の社会的评价	.18	-.01	.26	.27	.20	.11	.37	.12	.10	-.20	.15	.43	.63
因子寄与率		4.06	4.67	2.81	3.28	2.09	2.10	2.14	1.86	2.21	2.04	2.01	2.25	31.51
寄与率 (%)		8.45	9.72	5.85	6.83	4.35	4.37	4.46	3.89	4.61	4.25	4.18	4.68	65.65

今までの諸研究から考えて立てた仮説4よりも、因子数が多くなっている。これは、進路選択にはかなり多くの要因が関係していることから、当然の結果であると思われる。

これらをみると、進路選択に影響を及ぼす因子の構造は、かなり複雑で、かつ因子数も多くなっていることがわかる。植村（1977）は、いくつかの要因のうち1つだけで職業決定がなされるものではなく、職種によって、また個人によって、それぞれの要因への相対的ウェイトは異なり、これらの要因群のすべてが複合的に作用して、最終的な職業の決定がなされるものと考えられる、といっている。また、小杉（1990）は、職業、進路の決定を左右する要因として、本人の内発的な要因とともに、それに関連した外部的要因のさまざまな影響がある、といっている。これらのことから、また、本研究での因子分析の結果から、進路選択には、数多くの要因が影響を与えているということ、また複雑なものであるということ、が言えるのである。

抽出された12因子について、さらに、仙崎（1988）が言っている進路選択に影響する要因の2つの環境的・文化的・社会的要因と個人的・心理的決定要因等に基づいて、私なりに分類してみると、次のようになる。

I 個人的・心理的要因：

③心身の健康と活力、⑤就職以前の職業的経験、⑥職業適性、⑦就職の難易度、⑨生き方

II 環境的・文化的・社会的要因：

①職業に対する基本的知識、④職業の労働条件、②家族の助言と職業、⑧家庭状況に対する理解、⑩先輩・友人の助言、⑫学校の教師等の助言

III 偶発的要因：

⑪就職の際の運と縁故

さらに、II 環境的・文化的・社会的要因は、次のような3つの下位分類ができる。

社会的背景要因 ：①職業に対する基本的知識、④職業の労働条件

家族関係要因 ：②家族の助言と職業、⑧家庭状況に対する理解

家族以外の対人的影響要因：⑩先輩・友人の助言、⑫学校の教師等の助言

要 約

この研究の目的は、進路選択に影響を及ぼす要因について、その影響の程度やその因子構造を明らかにすることである。

被験者は大学工学部3、4年生男子の140名である。

主な結果は、次の通りであった。

1. 進路選択に非常に影響を及ぼす要因は、興味、職業の発展性、職業の安定度、適性、労働条件、給料そして福利厚生であった。逆に、進路選択にほとんど影響を及ぼさない要因は、家代々の職業、母親の職業そして親類の人の職業であった。

2. 進路選択に影響を及ぼす要因について、3年生は自分の希望を重視していたが、現実を目を向けていないようだ。4年生は、希望と現実とを適合させるために、現実と自己に目を向けているようだ。
3. 進路選択に影響を及ぼす要因について、出生順位について比較してみると、ほとんど差が認められなかった。
4. この要因の因子分析では、12因子が抽出された。

付 記

本研究の一部は、日本心理学会第56回大会（1992）及び日本教育心理学会第34回総会（1992）にて発表した。

引用文献

- Ginzberg, E., Ginzberg, S. W., Axelrad, S., and Herma, G. L. 1951 *Occupational choice : An approach to a general theory*. New York : Columbia University Press.
- 広井 甫・中西信男 1978 学校進路指導 その基盤と現実的諸問題 誠信書房
- 甲村和三 1989 進路選択における個性理解 市川典吉・柴山茂夫・甲村和三・寺本一美・林 文俊 職業生活の心理 — 進路選択とその指導 — 学芸図書出版社 Pp. 168-206.
- 小杉礼子 1990 調査研究の課題と方法 日本労働研究機構 調査研究報告書 No. 4 高卒者の進路選択と職業志向 — 初期職業経歴に関する追跡調査より — 日本労働研究機構 Pp. 5-13.
- 小竹正美・山口政志・吉田辰雄 1988 進路指導の理論と実践 日本文化科学社
- 雇用職業総合研究所 1990 キャリア調査票 A 日本労働研究機構 調査研究報告書 No. 4 高卒者の進路選択と職業志向 — 初期職業経歴に関する追跡調査より — 日本労働研究機構 Pp. 213-240.
- 増田幸一 1969 志望職業選択要因とその変動の調査 進路指導, 42(8), 18-24.
- 文部省 1977 中学校・高等学校進路指導の手引き — 進路指導主事編 — 日本進路指導協会
- 森下高治 1983 職業行動の心理学 ナカニシヤ出版
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.
- 仙崎 武 1988 青年の進路形成と職業選択 — その発達と指導 西平直喜・久世敏雄（編）青年心理学ハンドブック 福村出版 Pp. 576-602.
- スーパード E. 日本職業指導学会（訳）1960 職業生活の心理学 誠信書房
(Super, D. E. 1957 *The psychology of career*. New York : Harper & Brothers.)
- 田中宏二・小川一夫 1985 職業選択に及ぼす親の職業的影響 — 小・中学校教師・大学教師・建築設計士について — 教育心理学研究, 33, 173-178.
- Tiedeman, D. V. 1961 Decision and vocational development : A paradigm and implications. *Personnel and Guidance Journal*, 40, 15-20.
- 佃 直毅 1988 進路指導をどう考えるか 藤本喜八・中西信男・竹内登規夫（編）進路指導を学ぶ 有斐閣 Pp. 1-26.
- 植村勝彦 1977 進路・職業選択 久世敏雄（編）シリーズ現代心理学 第4巻 青年の心理 福村出版 Pp. 47-57.

An Examination of the Factors Influencing Career Choice

Takuso MATSUMOTO

Faculty of Liberal Art and Science

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1993)

The purpose of this study is to clarify some influential factors in career choice and their factor structure. The subjects were 140 male senior and junior university students whose fields of study were technologically related. The main results were as follows:

1) Those factors strongly influencing career choices were occupational interests and the aptitude of the subjects, occupational prospect and stability, working time, pay, and welfare. While those which had almost no influence were occupations where their family had managed a family business for generations and the ones of their mother and relatives engaged in. 2) Considering these factors, the juniors seemed to pay less attention to actual surroundings in spite of emphasizing their own employment hope, while the seniors paid more attention to both reality and themselves to influence their hope. 3) Birth order made almost no difference. 4) A total of twelve factors were extracted through factor analysis.